

# 私の一冊

一般教育等 垣口由香 先生

ソポクレス著 『オイディプス王』

小鹿図書館 ; 991.2/So 53 (岩波書店)

子供の頃、テレビであるアニメを見ていた私は衝撃を受けた。「何、この人たち!？」と。変わった響きの名前を持つ彼らはシーツのような白い布を体に纏い、植物で編んだ冠をかぶり、太い円柱が連なる白い家に暮らしている。空も飛べるし、動物と話もできる。たまに怒ると尋常ではない災いをもたらす。「何、この人たち!？」と私を驚かせた「この人たち」は、そう、人間ではなく人間の姿をしたオリンポスの神々であった。幼かったためか物語については全くと言って良いほど覚えていないのだが、西洋古代の神々の世界は私にとって衝撃的なまでに異質なものであったのだ。

その後、アニメのことも幼き頃に受けた衝撃も全く思い出すこともなく大学生となり、平穏な毎日を暮らしていたのだが、ある授業をきっかけに記憶の奥深くで長らく眠っていた古代ギリシャへの愛に再び目覚めることとなる。それは確か精神分析の授業であった。そこでソポクレスの『オイディプス王』に関するレポートが出されたのだ。精神分析理論の難解さに加え、二千年以上前の古典中の古典の放つ威光におののきつつ、気が進まないままに読み始めたことを覚えている。しかし、実際に読んでみると、見事にはまったのであった。

ここで、『オイディプス王』について簡単に紹介しておこう。ギリシャ悲劇の最高傑作と謳われるこの戯曲作品をソポクレスが書いたのは紀元前五世紀のことである。当時のギリシャ、アテネでは毎年ディオニュソス神(酒の神)を祝う大ディオニュシア祭と呼ばれる祭りが行われており、その最も人気のあった催しが悲劇競演、要するに今で言う演劇コンクールであった。ソポクレスの『オイディプス王』もこの大ディオニュシア祭の悲劇競演で上演されたものである(当然優勝したのかと思いきや、二等賞に甘んじたようです)。ギリシャ悲劇は、現代劇とは違い、神話や伝説をもとに作られる。したがって当時の聴衆ならば誰でも基となる神話や伝説を知っていたと考えられるが、文化的共通理解を持たない私たち現代人には、劇の前物語のあらすじが必要であろう。以下がそのあらすじである。

テバイの国を治めるラブダコス王家のライオス王は、ポイボス・アポロンの神託によって、自分の子供によって殺される運命であると告げられる。自身の運命を恐れたライオスは、妃イオ

カステとの間に男子が生まれると、その踝を留金で刺し、牧人に山深くに捨てるよう命じ、その子を手渡す。その後しばらく経って、再びアポロンの神託を請うために旅に出たライオスは、途中の三叉路で盗賊によって殺害される。王を失ったことで混乱に陥ったテバイの国は、さらにスフィンクスによって難題を突きつけられ、解けぬまま日に日に衰退してゆく。そんな危難のただ中にコリントスの王子オイディプスがこの国を訪れる。彼は見事にスフィンクスの謎を解いてテバイを救い、ライオスの跡を継いで王となり、先王の妃イオカステを妻とする。その後テバイの国は平和な時代を迎えるものの、疫病が広がり作物は枯れ、再び危殆に瀕することとなる。

ソポクレスの『オイディプス王』はここから始まる。オイディプスがエディプス・コンプレックスという精神分析の概念の語源であることから分かるように、この劇は父親殺しと母親との近親相姦に関する物語である。なかなかショッキングな内容ではあるが、読む前からあらすじを知っていた私にとってより衝撃的であったのは、オイディプスの頑ななまでに真理を追究する姿であった。

国の再建を目指すオイディプスにもたらされたポイボス・アポロンの神託は、テバイに災厄をもたらしているのは「ひとつ汚れ」(22)であり、汚れを浄めるためにライオスを殺害した罪びとを追放せよと告げる。これを聞いたオイディプスは「真理(まこと)」(38)の徹底究明を誓い、一途に詮議を進めてゆく。詮議の過程で盲目の予言者テイレシアスによって「この地を汚す不浄の罪びと、それはあなたなのだから」(38)と告げられたオイディプスは、怒り狂い、聞く耳を持たない。しかし、我が身の破滅へと至る「真理」に彼が自分自身の意志で一步一步近づいていることは明らかである。

ライオスの元妻イオカステが、これ以上進むとまずいことになるか気づいたのか、必死にオイディプスを止めようとするも、彼は「どんな不幸でも、起らば起れ。この身の素性が、いかに賤しくあろうとも、それを知ろうと心に決めた、わしの気持は変わりませぬ。」(83)と決して引こうとはしない。この時点ではまだ「真理」の内容をいくらか勘違いしているようだが、彼は確かに「真理」が自分の身にもたらす悪い結末を予感している。それでも知らねばならぬと言い張るオイディプスをただの強情っぱりとして片付けてしまうのは、安直過ぎるだろう。

これから読まれる方のために「真理」の内容はここでは明かさないが、その代わりに全てが明らかになった際のオイディプスの言葉を紹介しておこう。

ああ、思いきや！　すべては紛うかたなく、果たされた。おお光よ、おんみを目にするのも、もはやこれまで——生まれるべからざる人から生まれ、まじわるべからざる人とまじわり、殺すべからざる人を殺したと知れた、ひとりの男が！(91)

非情なる運命に対する絶望と諦観、神々に対する人間の無力さが随所に感じられる。しかしそれだけではなく、自分が誰であるのかをついに知り得た人間の安堵のようなものが読み取れるように思う。オイディプスの不幸は自らの無知が招いたものであるが、劇中テイレスiasが「ああ！ 知っているということは、なんというおそろしいことであろうか」(35)と「知」の恐ろしさを示唆しているように、「知」は必ずしも人間を幸福にするとは限らない。現に「真理」に達した後は、無知がもたらした以上の不幸が一挙にオイディプスを襲うこととなる。「知ること」の恐ろしさを認識しながら、「それでもわしは、聞かねばならぬ！」(90)と自分が何者であるのかを「知」らずにはいられないオイディプスの姿は、フィロソフィア(「愛知」)＝哲学を生んだ古代ギリシャ的精神を感じさせる。そして、これこそが『オイディプス王』を初めて読んだ際に私が受けた衝撃の源であった。

「何、この知へのパッションは！！」

この作品は、私に「知」あるいは「知ること」を意識的に考えるということを教えてくれたように思う。そしてこれを機に、私はギリシャ悲劇・喜劇を読み漁り、ギリシャ語の授業を受講し、古代ギリシャの思想を勉強した。ギリシャ語は活用があまりにも複雑で参ったが、これらは純粋に「知りたい」という気持ちからの勉強なので本当に楽しかった。当時は何かに役立つなどとはこれっぽっちも思っていなかったが、英文学研究の道へ進んだ現在何かと役立っている。しかし学生の皆さんに何よりも知ってもらいたいのは、地理的にも時間的にも遠く離れた、自分の知っている世界とは大きく異なる世界について「知りたい」と思い、学んだことが、確かに大学生当時の私を成長させたと今になって感じられることだ。自分を変えるほどの衝撃は遠くからやって来る。だから皆さんにも、最初から「好きじゃない」とか「興味がない」とか、「難しそう」などと決めつけず、とりあえず未知の本を手にとってみて欲しい(きっと今が良い時期だよ)。ソポクレスの『オイディプス王』はそんな一冊として最適な本と言えるだろう。